

触れば壊れてしまいそうなほど、可憐で、儂げな肢体……。
赤ん坊のくちびるのような……あどけない小さなふくらみ……。

「イタイ……」

清姫の声が耳朶を打った……。

安珍は、清姫の身体の上から、あわてて跳ね上がった……。

「どうしたの……？安珍……」

清姫の無垢な瞳が、不思議そうに安珍を見つめている……。

安珍を信じきった……その穢れを知らない眼差しに……安珍は、ガクガクと震えた……。

俺は……今……このいたいけな少女に……何をしようとしていたのだ……。

「……すまない……もういかなくちゃあいけないんだ……。」

清姫から顔を背けるように……安珍は、あわてていった。

急いで、身支度を整えると……安珍は、月明かりの中を逃げるように清重の屋敷を出て行く……。

「待つてるからね！約束だよオ」

戸口まで見送りに出た清姫の声が、背中に響いた。

その声に押されるように……安珍は、歩みを速める。

錫杖を、屋敷に忘れてきていたが、そんな事にも気が付かない……。

